

# 子どものボランティア活動活性化のための研究会 中間報告（平成 25 年度）

## 〔研究会設立趣旨（概略）〕

平成 24 年 7 月 13 日、総務省統計局から公表された社会生活基本調査によると、ボランティア活動の参加について、10 歳～14 歳は 26.6%がボランティア活動に参加し、平均活動日数は年 4.5 日、15 歳～19 歳は 21.9%がボランティア活動に参加し、平均活動日数は年 5.4 日となっており、まだまだボランティア活動への理解や参加が進んでいないのが現状である。

当センターが児童、生徒のボランティア活動の普及を進めるためには、指導する立場の人たちに対して、子どもがボランティア活動によって『人間力』、特に共助力を身につけること、そしてその力が社会生活を送る上で有意義であるということを説明できる客観的データが更に必要である。

そこで、それらのデータにより教職員にボランティア活動の教育上の意義を理解してもらうことなどを含め、子どものボランティア活動を活性化する方策を研究する研究会を設立し、その成果を提言にまとめ、社会に向け発信する。（研究会 平成 25 年度～平成 26 年度予定）

## 〔研究会メンバー〕

- ・早稲田大学文学学術院増山均教授研究室
- ・特定非営利活動法人さわやか青少年センター

## I. 「ふれあいボランティアパスポート」新成人アンケートから見えてくるもの

（佐賀県神埼市の場合）

特定非営利活動法人さわやか青少年センター

### 平成 25 年度ふれあいボランティアパスポート事業における ふれあいボランティア活動の継続性の意義についての調査

#### 【さわやか青少年センターについて】

さわやか青少年センターは、子どもの健全育成のためには子ども自らが『人間力』（自ら生きていこうとする「自助の力」とみんなで助け合って生きていこうとする「共助の力」）を育むことが大切であると考えている。

当センターではふれあいボランティア活動（ボランティア活動において、人と人とのふれあいを重視しながら取り組むボランティア活動のこと。以下、ボランティア活動という）に子どもたちに取り組んでもらうことが最善であると考え、小中高等学校にボランティア活動の取り組み実施を働きかけている。その際には、児童、生徒が自ら喜んでボランティア活動に取り組めるように、ボランティア活動の「きっかけ」と「継続」に効果を発揮する“ふれあいボランティアパスポート”（公益財団法人さわやか福祉財団が平成 12 年度開発）をツールとして活用している。（ふれあいボランティアパスポートの詳細は、別紙添付）

平成 25 年度は、全国の小中高等学校 101 校 2 団体でボランティア活動にこのふれあいボランティアパスポート（以下ふれあいパスポートという）を活用しており、参加児童、生徒数は 30,155 人である。

#### 【ふれあいパスポートの成果の検証について】

当センターでは、在学中の児童、生徒の『人間力』がどのように育まれているかについては、ふれあいパスポートの感想欄や感想文の募集によって検証を行っており、その成長については確認できていると思っている。しかし、最も大切なことは、児童、生徒が卒業して社会人になっても『人間力』を発揮してくれているかということである。このことについての検証は、ボランティア活動に取り組んだ児童、生徒が成人を迎えていない段階では検証ができずにいた。

しかし、さわやか福祉財団が、児童、生徒のふれあいパスポートを活用したボランティア活動の普及に取り組み始めた平成 12 年度から当センターが取り組んでいる昨年、平成 24 年度までの 12 年の間に社会人となった人たちが出てきた。

そこで、平成 24 年度は、平成 15 年度から昨年度まで教育委員会として継続して全ての小中学校でふれあいパスポートを使って（現在は神崎市オリジナルのパスポートを作成し、ふれあいパスポートフレンズとして参加している）ボランティア活動に取り組んでいる佐賀県神崎市と、平成 16 年度から当センターのふれあいパスポートを使用し全ての小中学校でボランティア活動に取り組んでいる福島県棚倉町の教育委員会にご協力をいただき、当時ふれあいパスポートを使用してボランティア活動に参加した児童が 20 歳になり成人式に参加した新成人に対して、社会人としてその活躍が期待されるボランティア活動を『人間力』の評価指標として、小学生の時から現在までのボランティア活動の実施についてのアンケート調査を行った。

神崎市では合併前の旧千代田町の全小、中学校 4 校が平成 15 年度ふれあいパスポートを採用しており、当時の小学校 3 校の 5 年生だった児童が中学 3 年生まで最も長くふれあいパスポートを使用しており、棚倉町では全小学校 5 校の当時の小学校 6 年生だった児童が中学 3 年生まで最も長くふれあいパスポートを使用していた。

ふれあいパスポートを最も長く使用した神崎市の当時小 5 の児童だった方及び棚倉町の当時小 6 の児童だった方が新成人として成人式を迎えた平成 25 年 1 月 13 日（日）、昨年度は神崎市 32 人、棚倉町 20 人の合計 52 人の新成人の方にアンケート調査にご回答いただいた。

そして、平成 25 年度も、引き続き、佐賀県神崎市及び福島県棚倉町を対象に継続して新成人アンケート調査を実施した。今回も、神崎市及び棚倉町の新成人を対象にアンケート調査を平成 26 年 1 月 12 日（日）両市町の成人式の日、成人式会場にて実施した。しかし、棚倉町については会場での回収が困難であったため、調査を中止した。神崎市においては神崎市の旧千代田町の新成人 129 人（当時小学校 4 年生で中学 3 年まで 6 年間ふれあいパスポート使用中、成人式に出席した 112 人）を対象にアンケート調査を実施し、55 人の新成人からアンケートを回収することができた。

そこで、平成 25 年度は神崎市（旧千代田町のみ）のみの状況を分析するとともに、昨年の神崎市（旧千代田町のみ）の状況との比較を行った。

その結果は、以下の通りである。（但し、今回の分析は神崎市のみのものであり、あくまでも 55 人の回答から見たまとめである。今後、更に継続して回答数を増やし、分析を続けたいと考えている。）

このデータの集計に当たっては、統計処理には埼玉純真短期大学特任講師齋藤史夫先生のご協力をいただき、また、早稲田大学文学学術院教授増山均先生に監修をお願いした。

## 平成 25 年度新成人ボランティア活動アンケート調査結果まとめ

◆平成 25 年度アンケート調査では、ボランティア活動に全校で取り組んだ小、中学校を卒業した新成人の 5 割以上 (52.7%) がボランティア活動に取り組んでいる。昨年度は、6 割 (62.5%) を超えており、引き続き、高い割合を保っている。

総務省が 5 年ごとに調査している社会生活基本調査の平成 23 年度調査では、20 歳～24 歳の社会人がボランティア活動に取り組んでいる割合は 21.2% である。神埼市の新成人と社会生活基本調査の割合と比較すると平成 25 年度は約 2.5 倍、平成 24 年度は約 3 倍という高い割合である。

(グラフ 24、25 p12 より)

◆小中高等学校と段階的、継続的にボランティア活動をした児童、生徒は、新成人になってもボランティア活動をする割合が 5 割から約 7 割と高い。昨年度は、約 7 割から 8 割以上であり、引き続き、高い割合を保っている。

このことは、以下のことを基にしている。(グラフ 22、23 p11 より)

- 小学校時代にボランティア活動に取り組んだ児童は、新成人の現在も 55.3% (昨年度 72.0%) がボランティア活動に取り組んでいる。
- 中学校時代にボランティア活動に取り組んだ生徒は、新成人の現在も 54.5% (昨年度 70.8%) がボランティア活動に取り組んでいる。
- 高等学校時代にボランティア活動に取り組んだ生徒は、新成人の現在も 65.8% (昨年度 85.0%) がボランティア活動に取り組んでいる。(※ p4)
- 小中高等学校と継続してボランティア活動に取り組んだ児童、生徒は、新成人の現在も 67.6% (昨年度 84.2%) がボランティア活動に取り組んでいる。

◆アンケート調査実施対象者の各年代毎のボランティア活動の取り組みを社会生活基本調査と比較すると、神埼市は年代によって約 2.4 倍～4.3 倍の割合となっており、神埼市がいずれの年代でも高い割合となっている。昨年度に引き続き、今年度も高い割合を保っている。

このことは、以下のことを基にしている。(グラフ 24、25 p12 より)

神埼市 (旧千代田町のみ)

小学校時代 (平成 15～17 年)	10 歳～12 歳	85.5%	(昨年度 11 歳～12 歳 78.1%)
中学校時代 (平成 18～20 年)	13 歳～15 歳	80.0%	(昨年度 13 歳～15 歳 84.4%)
高等学校時代 (平成 21～23 年)	16 歳～18 歳	69.1%	(昨年度 16 歳～18 歳 62.5%)

(比較)

社会生活基本調査 (平成 13 年)	10 歳～14 歳	36.3%
社会生活基本調査 (平成 18 年)	15 歳～19 歳	18.7%

(※)

なお、市町の教育委員会管轄の小中学校を卒業し、高等学校に進学した生徒たちは入学した高等学校によってボランティア活動への取り組み姿勢が異なるにもかかわらず、**69.1%**（昨年度**62.5%**）という高い割合であるのは、小学校、中学校でボランティア活動に取り組んだ児童、生徒が高等学校でボランティア活動に取り組んだ割合が**76.6%**（昨年度**76.0%**）、**77.3%**（昨年度**70.4%**）と高いことから、小学校、中学校と継続してボランティア活動に取り組んでいることが高等学校でのボランティア活動の割合を高くしているものと思われる。昨年度の引き続き、高い割合を保っている。（グラフ 9、10、11～14 p8より）

◆ふれあいボランティアパスポートは、児童、生徒にとって有効なツールであると考えられる。

当センターが配布しているボランティアパスポートについて、新成人に小学校在学当時、ボランティア活動に取り組むに当たって有効であったか尋ねたところ、**76.4%**（昨年度**84.4%**）が有効であったと回答し、中学校当時においても**78.2%**（昨年度**75.0%**）が有効であったと回答している。（グラフ 3、4 p6 / グラフ 7、8 p7より）

昨年度に続き、ふれあいパスポートの有効性が検証された。当センターでは、今後も引き続き検証を継続していく。

以上のような検証結果から、子どもの時から継続的にボランティア活動に取り組むことは大変有意義なのではないかと考えているところである。各学校におかれましては、積極的にボランティア活動に取り組んでいただきたいと思っている。

その際には、児童、生徒がより主体的、継続的に取り組むよう、ボランティアの意義の理解を進めたり、当センターのふれあいボランティアパスポートなどのような意欲を出させる「きっかけ」の提供や「継続」のための工夫をしたりするなどをご検討いただければ幸いである。

今後も小中高等学校時代にボランティアに取り組んだ新成人への調査を行い、検証を継続して行っていきたいと考えている。

# 平成 25 年度新成人ボランティア活動アンケート調査の概要 (ふれあいボランティアパスポートを使ったボランティア活動の継続性についての検証)

## 【趣旨】

ふれあいボランティアパスポートは、概ね小中高等学校の児童、生徒を対象にボランティア活動の「きっかけ」と「継続」に有効なツールとして開発されたものである。その詳細は、別紙の通りである。〔さわやか青少年センターのホームページにも掲載。  
(<http://www.ssc-npo.or.jp>)〕

平成 12 年度からふれあいボランティアパスポート事業に取り組み始めて、平成 26 年 3 月まで丸 14 年が経過しました。その間、多くの小中高校の児童生徒にこのツールを使ってボランティア活動に参加していただいた。

しかし、小中高校を卒業した後、彼らがボランティア活動に取り組んでいるかどうかについて検証できるまでに至っていなかったが、昨年度から検証を開始できるようになった。

そこで、平成 15 年度、16 年度からふれあいボランティアパスポートを使ってボランティア活動に取り組んでいる佐賀県神崎市と福島県棚倉町の 2 つの教育委員会の協力を得て、昨年度から新成人へのアンケート調査を実施した。

今年度は 1 月 12 日（日）に成人式に参加する新成人（平成 25 年度内に 20 歳となる人たち）を対象にして、小中学校時代から新成人になるまでの間のボランティア活動への取り組み状況についてアンケート調査を行い、佐賀県神崎市（旧千代田町のみ）のアンケート調査のみが有効となったため、佐賀県神崎市（旧千代田町のみ）について小中学校在学時と卒業後の新成人になる時までのボランティア活動の継続性について検証を試みた。

## 【アンケート対象団体・対象者と調査方法】

### （対象団体）

ふれあいボランティアパスポート事業参加の教育委員会

- 佐賀県神崎市教育委員会（当時、千代田町教育委員会所管下）  
平成 15 年度から小学校 3 校、中学校 1 校の全校が参加

### （対象者）

- ふれあいボランティアパスポートを使用してボランティア活動に取り組んでいる千代田町の小中学校に、平成 15 年度の当時小学校 4 年生で在学し、中学 3 年生までの 6 年間在学した児童、生徒で、平成 25 年度内に 20 歳になった新成人のうち、成人式に出席した新成人。

### （調査方法）

- 平成 26 年 1 月 12 日（日）、神崎市で行われた成人式に出席した旧千代田町の新成人に対してアンケート調査用紙と鉛筆を配布し、記入してもらい、成人式終了時に会場退出時に回収した。

## 【調査の概要】

- 佐賀県神崎市教育委員会（当時千代田町教育委員会所管下）  
平成 25 年度新成人 129 人、成人式参加者 112 人中 55 人（43%）から回答を得た。  
（平成 24 年度新成人 141 人、成人式参加者 127 人中 32 人（23%）が回答。）

## 平成 25 年度新成人ボランティア活動アンケート調査

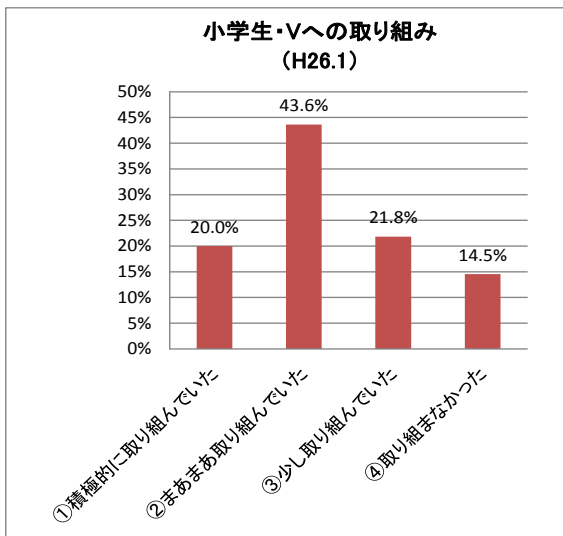
※グラフの見方について

グラフにおける V は、ボランティア活動のこと。また、グラフは昨年度との比較は、肯定的な意見はそれぞれまとめて比較しており、小数点以下は 2 桁を四捨五入して示している。

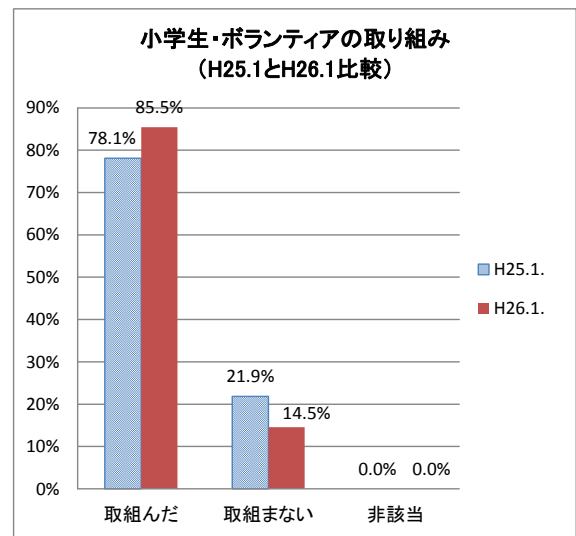
### 【小学校でのボランティア活動】

佐賀県神埼市でふれあいボランティアパスポートを使ったボランティア活動に取り組み始めたのは、平成 15 年度からで、今回調査した新成人は当時小学 4 年生から 6 年生までの 3 年間、活動に取り組んでいる。

小学校の時にボランティア活動に取り組んでいたか尋ねたところ、何らかの形で **85.5%** が取り組んでいたという回答でした。昨年度は **78.1%** であり、今年度も引き続き、高い割合を示している。(グラフ 1、2 より)



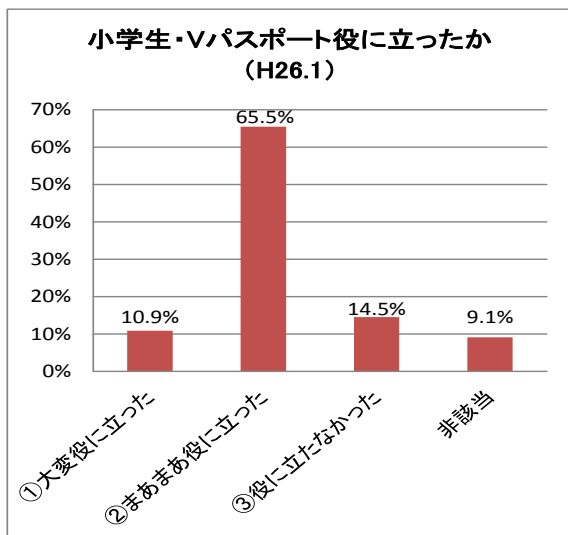
(グラフ 1)



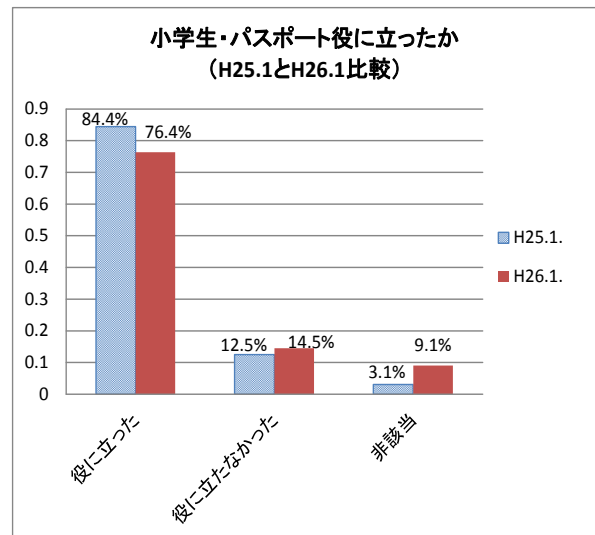
(グラフ 2)

### 【ふれあいボランティアパスポートは役に立ったか】

ボランティア活動に取り組むきっかけとして、配布されたふれあいボランティアパスポートについて、役に立ったと思うか尋ねたところ、**76.4%** が役に立ったという回答であった。昨年度は **84.4%** であり、今年度も引き続き、高い割合を示している。(グラフ 3、4 より)



(グラフ 3)

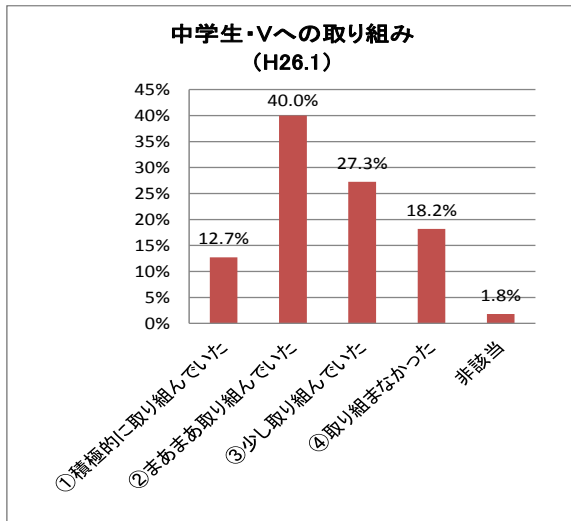


(グラフ 4)

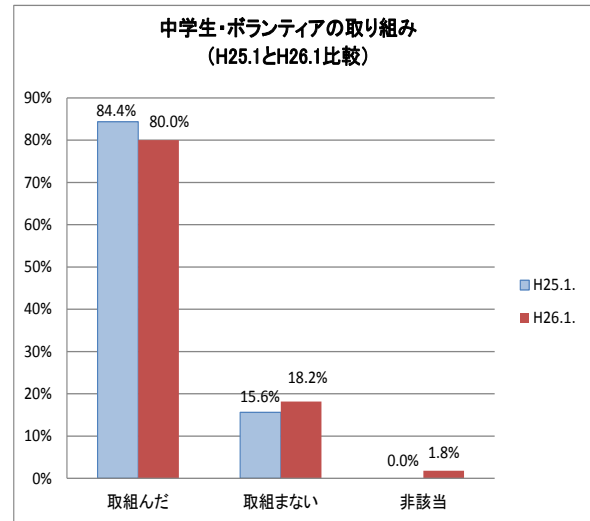
## 【中学校でのボランティア活動】

中学校では、ふれあいボランティア活動を生徒が入学して卒業するまでの間、3年間継続して取り組んでいる。

そこで、中学校の時にボランティア活動に取り組んでいたか尋ねたところ何らかの形で**80.0%**が取り組んでいたという回答であった。昨年度は、**84.4%**であり、今年度も引き続き、高い割合を示している。(グラフ 5、6 より)



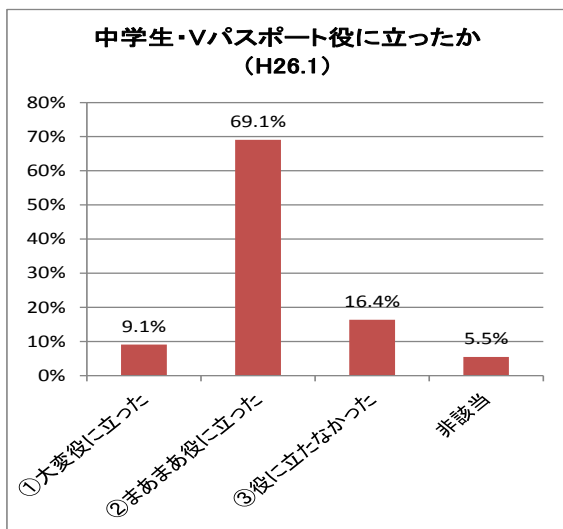
(グラフ 5)



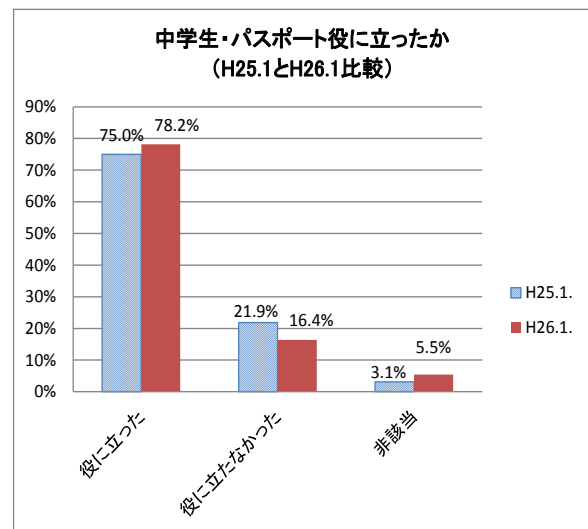
(グラフ 6)

## 【ふれあいボランティアパスポートは役に立ったか】

ボランティア活動に取り組むきっかけとして、配布していたふれあいボランティアパスポートについて、役に立ったと思うか聞いたところ、**78.2%**が役に立ったという回答であった。昨年度は、**75.0%**であり、今年度も引き続き、高い割合を示している。(グラフ 7、8 より)



(グラフ 7)

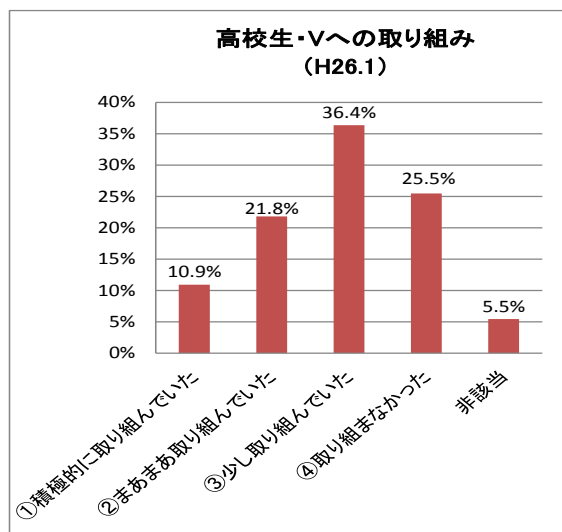


(グラフ 8)

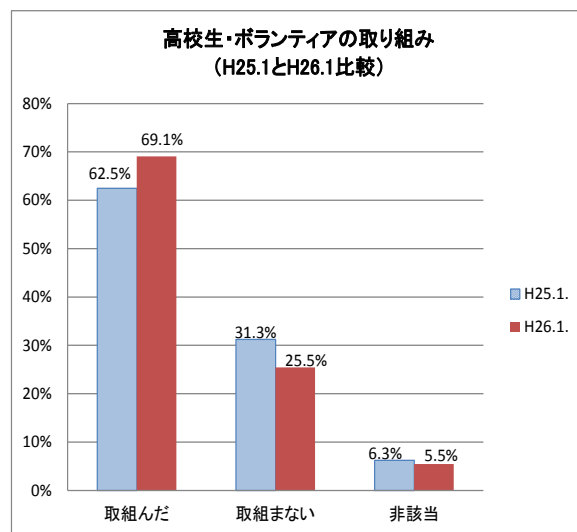
## 【高等学校でのボランティア活動】

小中学校は神埼市教育委員会の管理下にある学校であるが、高等学校は県立、国立、私立などの区別はあるにしても神埼市と所管が異なるため、ボランティア活動の取り組みについては新成人たちが当時入学した高等学校によって取り組み状況はかなり異なっているのではないかと考えられたが、高等学校になっても**69.1%**がボランティア活動に取り組んでいたという回答であった。

昨年度は、**62.5%**であり、今年度も引き続き、高い割合を示している。(グラフ 9、10 より)



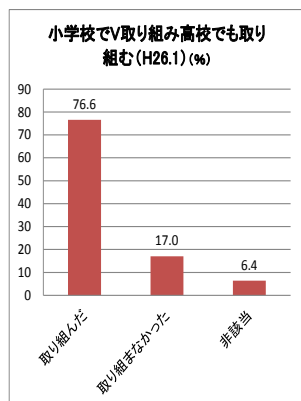
(グラフ 9)



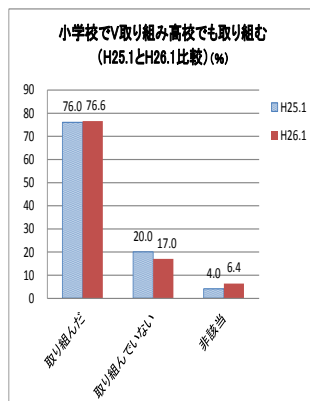
(グラフ 10)

次に、小学校の時にボランティア活動に取り組んでいた児童は、高等学校になっても**76.6%**がボランティア活動に取り組み、中学校の時にボランティア活動に取り組んでいた生徒は、高等学校になっても**77.3%**がボランティア活動に取り組んでいたという結果がでた。

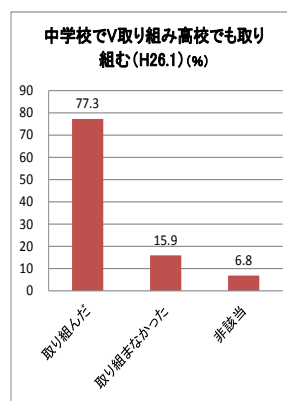
昨年度は、小学校でボランティア活動に取り組んだ児童は高等学校になっても**76.0%**、中学校の生徒は高等学校になっても**70.4%**がボランティア活動に取り組んでおり、今年度も引き続き、高い割合を示している。(グラフ 11、12、13、14 より)



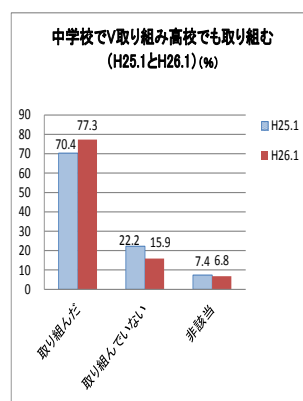
(グラフ 11)



(グラフ 12)



(グラフ 13)

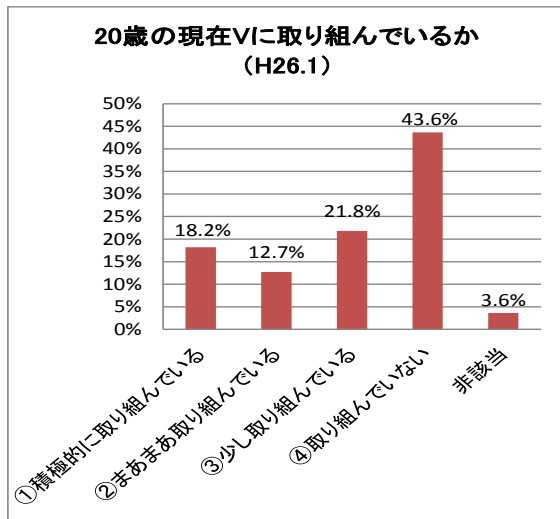


(グラフ 14)

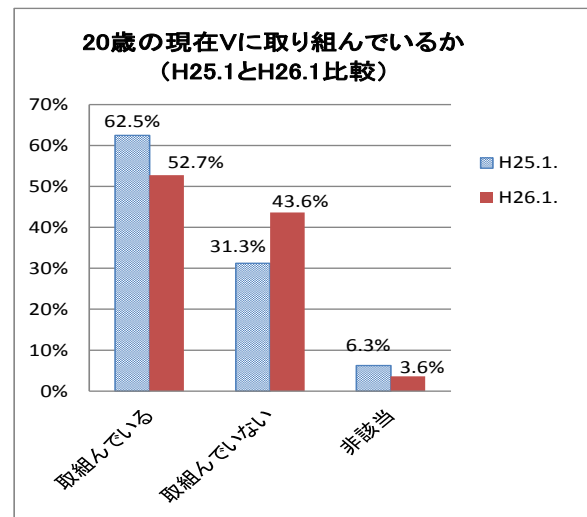


## 【新成人はボランティア活動に取り組んでいるか】

新成人に、現在、ボランティア活動に取り組んでいるか聞いたところ、何らかの形で **52.7%** が取り組んでいるという回答であった。昨年度は、**62.5%**であり、今年度も引き続き、高い割合を示している。(グラフ 15、16 より)



(グラフ 15)



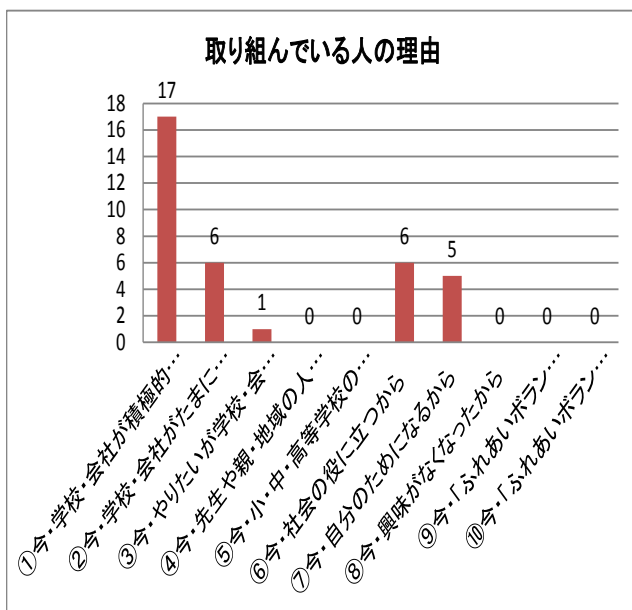
(グラフ 16)

## 【現在、ボランティア活動に取り組んでいる理由】

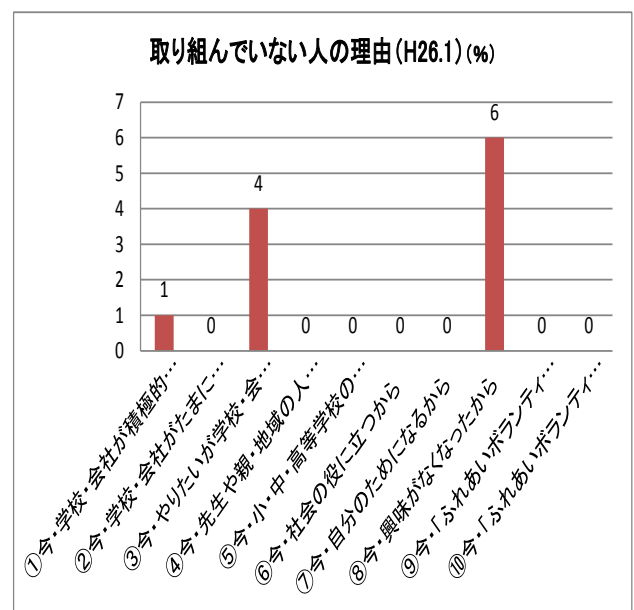
現在、ボランティア活動に取り組んでいる理由は、「学校・会社が積極的に取り組んでいるから」が最も多く、次に「学校・会社がたまに取り組んでいるから」、「社会の役に立つから」が同じ数で続いており、さらに「自分のためになるから」となっている。(グラフ 17 より)

## 【現在、ボランティア活動に取り組んでいない理由】

現在、ボランティアに積極的に取り組んでいない理由は、「興味がなくなったから」が最も多く、次に「やりたいが、学校・会社に取り組んでいないから」となっている。(グラフ 18 より)



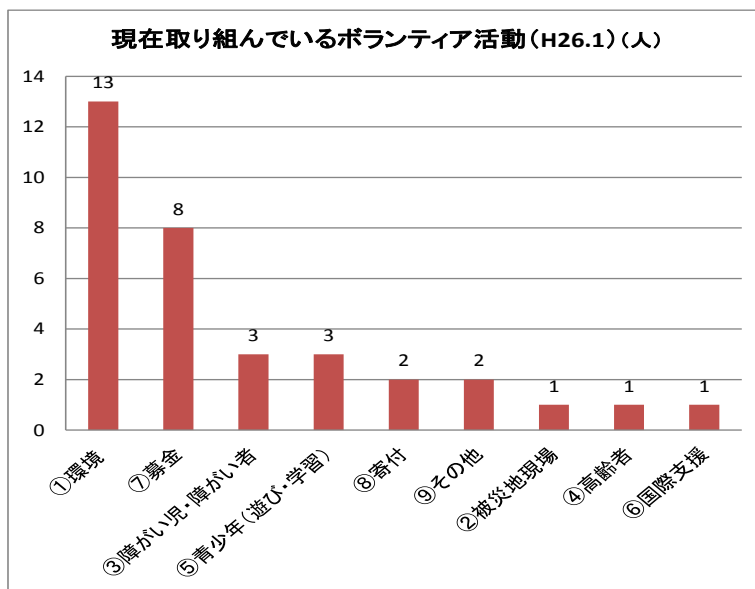
(グラフ 17)



(グラフ 18)

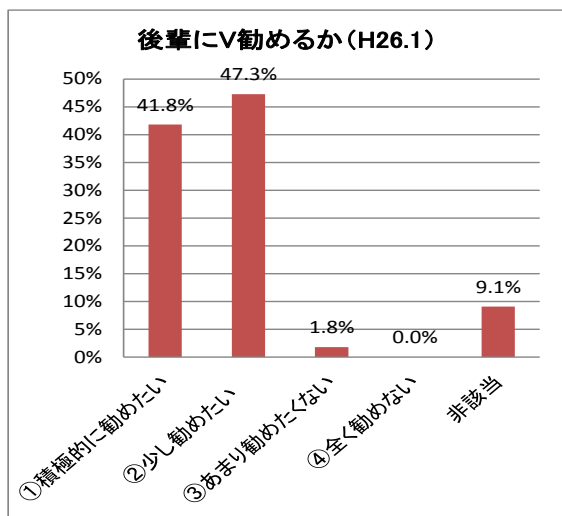
## 【現在取り組んでいるボランティア活動の内容】

8つの活動内容とその他を含め9つの選択肢を示したところ、「環境」に対するボランティア活動が最も多く、次に「募金」、そして「障がい児・障がい者」と「青少年（遊び・学習）」と続き、「被災地現場」や「高齢者」支援、「国際支援」などさまざまなボランティア活動に取り組んでいることが分かった。（グラフ 19 より）

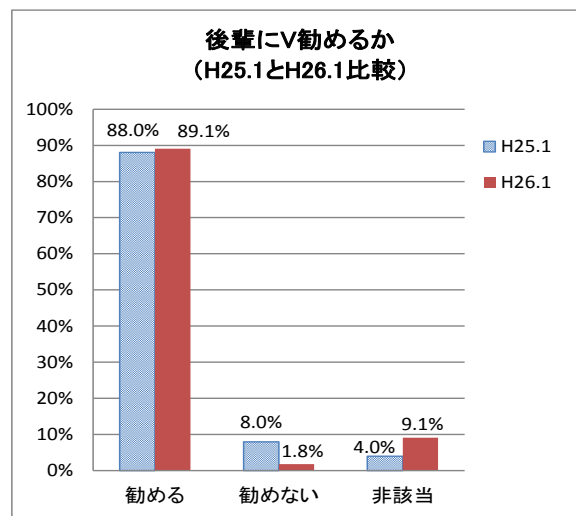


## 【新成人は後輩にボランティア活動を勧めるか】

新成人に、後輩の児童、生徒に対してボランティア活動への取り組みを勧めるか聞いたところ、**89.1%**が勧めたいという回答であった。昨年度は、**88.0%**であり、今年度も引き続き、高い割合を示している。（グラフ 20、21 より）



(グラフ 20)



(グラフ 21)

## 【各年代と新成人のボランティア活動の取り組みの関係】

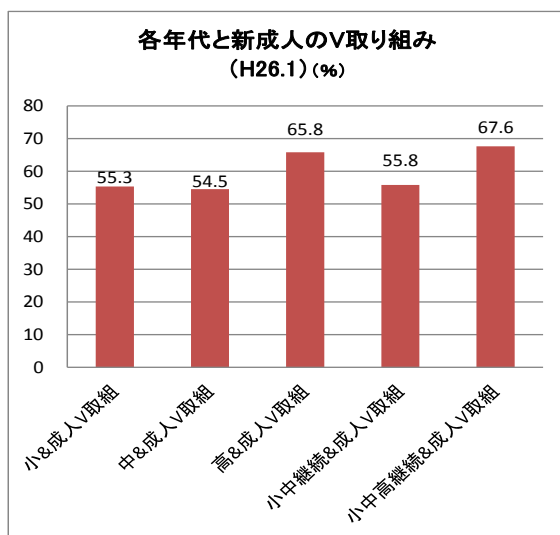
小学校時代にボランティア活動に取り組んでいたと回答した新成人は、**55.3%**が現在もボランティア活動に取り組んでいると回答している。昨年度は、**72.0%**で今年度は約**17%**低下したが、引き続き、高い割合を示している。

同様に、中学校時代にボランティア活動に取り組んでいたと回答した新成人は、**54.5%**が現在もボランティア活動に取り組んでいると回答している。昨年度は、**70.8%**で今年度は約**15%**低下したが、引き続き、高い割合を示している。

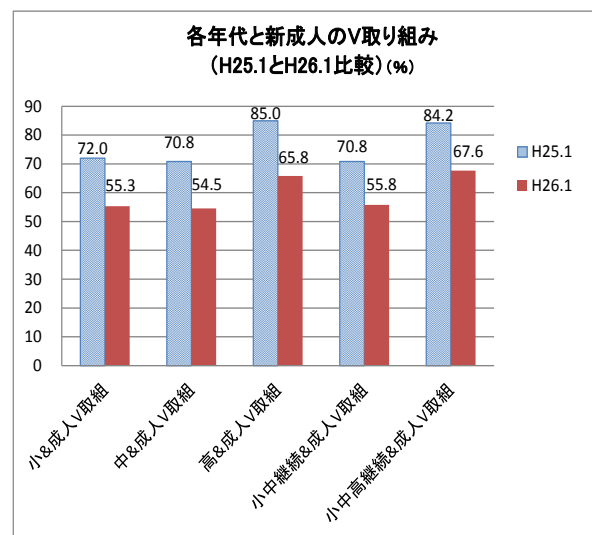
高等学校時代にボランティア活動に取り組んでいたと回答した新成人は、**65.8%**が現在も取り組んでいると回答している。昨年度は、**85.0%**で今年度は約**19%**低下したが、引き続き、高い割合を示している。

また、小学校、中学校で継続してボランティア活動に取り組んでいたという新成人は**55.8%**が現在も継続してボランティア活動に取り組んでいる。昨年度は、**70.8%**で今年度は**15%**低下したが、引き続き、高い割合を示している。

同様に、小中高等学校で継続してボランティア活動に取り組んでいたという新成人は**67.6%**が現在も継続してボランティア活動に取り組んでいる。昨年度は、**84.2%**で今年度は約**17%**低下したが、引き続き、高い割合を示している。(グラフ 22、23 より)



(グラフ 22)



(グラフ 23)

## 【ボランティア活動の社会生活基本調査と神埼市の比較】

神埼市の新成人の子ども時代に近い時期の社会生活基本調査（総務省統計局）から、同等の年代のボランティア活動への参加についての比較を試みた。

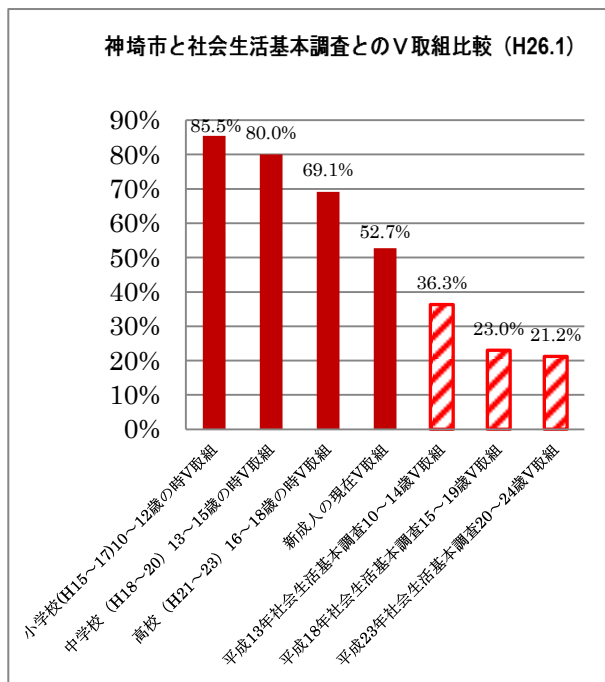
その結果、

平成 13 年社会生活基本調査（10 歳～14 歳）のボランティア活動への取り組みは **36.3%**であったが、神埼市では平成 15 年度ボランティア活動に取り組んだ小学生（4 年生＝10 歳）は **85.5%**（約 **2.4 倍**）であった。昨年度の神埼市は **78.1%**（約 **2.2 倍**）で、今年度も引き続き、高い割合を示している。

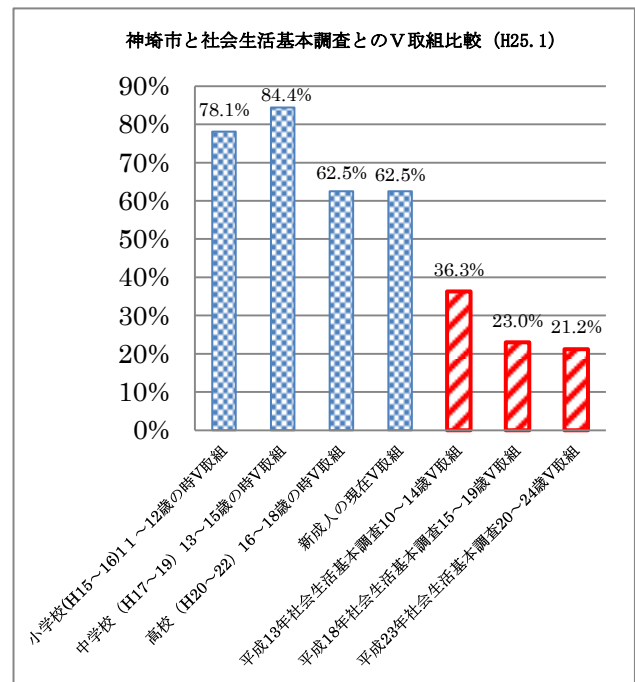
同様に、平成 18 年社会生活基本調査（15 歳～19 歳）では **23.0%**であったが、神埼市では平成 18～20 年度の中学生（1～3 年生＝13 歳～15 歳）は、**80.0%**（約 **3.5 倍**）、平成 21～23 年度の高校生（16 歳～18 歳）は **69.1%**（**3.0 倍**）であった。昨年度の神埼市の中学生は **84.4%**（約 **4.5 倍**）、高校生は **62.5%**（約 **3.3 倍**）で、今年度も引き続き、高い割合を示している。

そして、平成 23 年社会生活基本調査（20 歳～24 歳）では **21.2%**であったが、神埼市の平成 25 年度現在の新成人（20 歳）は、**52.7%**（約 **2.5 倍**）という結果がでた。

（グラフ 24、25 より）



(グラフ 24)



(グラフ 25)

## Ⅱ. 子ども期の「ボランティア活動」への視点

増山 均（早稲田大学文学学術院教授）

### 1. ボランティア作文を通して考える

「ボランティアパスポート」を活用した取り組みが各地で展開され、「ボランティア感想文」がたくさん寄せられている。さわやか青少年センターでは、それらの感想文のなかからボランティア活動の精神と意義を的確に表現しているものを選んで表彰し、『ふれあいボランティア活動感想文集』を発刊しているが、表彰されなかった作文も含めて、寄せられた多数の感想文は貴重な資料である。それらを素材にして、「ボランティアパスポート」を活用した子どものボランティア活動の意義を考える上での課題を検討してみたい。

次に紹介する3つの作文は、いずれも選外になった作文であるが、検討の素材として紹介する。（抜粋・引用。下線は、検討の過程で注目した部分である）

これらの作文につづられた子どものたちの声の中から、「ボランティア活動」を通じて得た子どもたちの成長につながる「気づき」のポイントは何かを拾い出すことから始めよう。

#### 小学校低学年

わたしが、今年おこなったボランティア活動は、クリーン作せん、アルミカン、修学旅行のゴミひろい、スリッパならべ、米あらいです。修学旅行のゴミひろいでは、いっしょうけんめいがんばりました。

特にがんばったことは、クリーン作せんです。ボランティアをすると、心がすっきりした気持ちになります。

**ボランティアパスポート**は、やっと三まい目になりました。

ボランティア活動を通して自分がせい長したことは、すすんでやることです。

これからやっていこうと思っていることは、重たい物をもって、きつそうにしている人を見かけたら、はずかしがらずに声をかけようと思います。

#### 小学校高学年

私はボランティアをするたびに気持ちが良くなります。だれかにいわれてやった時と自分から進んでやった時の気持ちは全ぜんちがいます。私の今年のボランティアは心を育ててくれたボランティアになりました。

今年も7月に**ボランティアパスポート**がわたされ、去年よりもレベルが上がったボランティアをすると決めて生活しました。けれどまずできることから始めました。地域の落ちていたゴミを拾う、お年寄りのやさしくするなどをしました。どの事をやっても必ず気持ちが良くなりました。下級生に優しくしていると、先生が「さすが高学年！！」と声をかけてくれた時、とてもうれしくなりました。小さなボランティアをたくさんしていると去年よりも気持ちが良くなる事がおおくなっていました。私はレベルが上がったボランティアをもうしているのかなと思いました。それから少したつと家の人や先生方に「手伝って」などいわてやる事が多くなってしまいました。

お母さんに、「近所の人がAちゃん自分から進んでゴミ拾ったりしていてすごいねっていわれたよ。」と言われて、また自分から進んでやろうと決めました。人の気持ちを考えて泣いて

いた下級生に話しかけたり、家の人や先生の手伝いをしたりしました。

ボランティアは自分も心が気持ちよくなって、相手も心が気持ちが良くなる事だとわかりました。ボランティアは、する人の心を育ててくれる物だとわかりました。これからもできる事をして心を育てていきたいと思います。

小学校高学年

私は、2ヶ月に1回の地区の資源回収に参加しています。資源回収では、カン・1升瓶・新聞紙・雑誌などの回収を積極的に行っています。子ども会が中心になり、リヤカーなどを利用して、皆の自宅前にだしてある資源を回収します。地域の方々にも協力していただき、毎回たくさん集まります。

1年生の時は、資源回収って、なんであるのかな。面倒だな。と思っていました。でも4年生、5年生の総合で学習した、環境問題では、オゾン層の破かい・砂漠化・酸性雨などが問題になっている事が分かり、そしてゴミも問題になっているという事も分かりました。そのことから、最近、積極的に資源回収に参加するようになりました。

これからは、ただなんとなく資源回収に参加するだけでなく、地球の環境も考えて、積極的に資源回収やボランティアに参加したいと思います。

地域全体が、ものをすてるのではなく、再利用するいしきが高くなっていると思います。子供会の時に、その大切さを学ぶことは、これから、成人になっていくので、とてもいい事だと思います。来年も地域一丸となつてがんばりたいと思います。

学校の周りには、自然がたくさんあり、夏には蛍が飛んで、リスがいつも校庭に遊びに来ます。この自然が豊かな環境を保ちたいです。

そのために、私は、道に落ちているゴミを拾ったり、電気をこまめに消す、使わない時は水道の水は出さないなどを心がけていきたいです、日常の小さなことでも、私ができるのであれば進んで活動したいです。

## 2. 子どもたちの「気づき」のポイントは何か

### ① 「ところが、気持ちが良くなる」ということ

「ありがとう」と声をかけられたときの「うれしさ」。やりとげたあとの「すがすがしさ」。「ところがスッキリした」など清掃活動に参加してキレイにしたのは、地域の環境であると同時に、自分のところが気持ちであったことを発見している。どの感想文も、「ボランティア活動」に取り組んで感じた自分の心の動き、気持ちの変化を、しっかりと見つめていることが記されている。

### ② 「自分からすすんで取り組む」ということ

たとえ「ボランティアパスポート」が取り組みのキッカケだったとしても、先生や親に誘われて取り組みに参加したとしても、その中で「自分から進んで取り組む気持ちが大切であること」への“気づき”にも注目したい。「自分で進んでやったときの気持ちはぜんぜん違う」ことを知り、自発性・主体性が重要であることを発見している。

### ③ 「活動を通して考える」こと、「学習と結びつける」こと

実際に活動してみると、「感じる」ととともにいろいろ考える。特に高学年の作文に現れている「どうして、ごみを捨てるのかな」、「だれが、こんなに捨てるのかな」、「どうしたら改善できるだろうか」「自分が大人になったら、このようにしたい」と。地に足をつけて考える姿勢、思考の発展を重視したい。「こころ」の問題だけでなく、体験を通して感じたこと・考えたことを「学習に結びつける」ことが大切である。ゴミ問題から、地球環境の破壊問題、地球の資源問題などを、学校のカリキュラムを通じて学ぶことにより、ボランティア活動の意義の深い理解へとつながる。その点でも、学校教育との連携が不可欠であろう。

### 3. 「あてにされる」関係の創造—「出番と役割と立場をつくる」こと

人間の生きがいにとって重要な要素は、日々の人間関係の中で「あてにされる」ということである。「あてにされる」ということは、子どもの育ちにとっても、きわめて重要な要素である。

人間関係の中で、「あてにされる」ということは、そこに自分の出番と役割があり、自分の立場があるということであり、立場に付随した責任があるということである。どんなに小さくとも、人間は「役割」を持ち、「出番」が与えられ、「責任」を果たすことにより、「立場」を獲得し成長していく。家庭でも、学校でも、職場でも、地域社会でも、「あてにする—あてにされる」という関係のなかで、自分は「役に立っている」「必要とされている」と実感できることで、自尊感情が強まっていく。

今日の教育や子育てで失われている視点は、子どもたちは守られ、サービスを与えられる存在ではあっても、「あてにされる」存在になっていないということである。子どもの生活のなかに出番と役割が失われ、家庭と地域社会の中で「子どもたちは失業している」のである。

かつて第一次産業を基礎として村共同体が機能していた時代は、「子守り」という仕事があり、「手伝い」という家事労働・生産労働があった。また、村の祭りや伝統芸能の中に、さまざまな形で子どもたちの出番と役割が組み込まれ、子どもたちは当てにされていた。家庭を超えた地域社会の中に、他に変えがたい役割と出番があり、子どもたちは「あてにされる」存在だったのである。

幼い時から、役割を果たす年長の子を見てまねをし、始めは小さな役割から、次第に少しずつ大きな役割を獲得し、それをやり遂げていくことを通じて、子どもたちは共同体の一員として成長していった。

いまなぜ地域社会の中での「ボランティア活動」が必要なのかといえば、地域社会の中に子どもたちの役割と出番があることを見出し、子どもたちの知恵と力を「あてにする」人間関係を生み出すためである。

## 4. 子どもにとって「ボランティア」とは

### ① 「ボランティア活動」の中身の検討が求められている

学童・生徒のボランティア活動には、13分野（下記）あると指摘されているが、これらの分類は非常に曖昧である。

【1あつめる・つものる（収集・募金活動）、2つくる（製作・創作活動）、3ふれあう（友愛・交流活動）、4てつだう（サービス活動）、5ひろめる（啓発・啓もう活動）、6しらべる（調査・研究活動）、7ととのえる（地域環境整備活動）、8まなぶ（学習活動）、9つたえる（文化伝承活動）、10たのしむ（てい幾・レクリエーション活動）、11まもる・ふせぐ（生活改善・保健衛生・医療看護の活動）、12なかよくする（国際協力・国際理解活動）、13まねく（学校行事への招待活動）】

子どもたちの作文を見ていると、取り組んだ「ボランティア活動」の中身もさまざまであることがわかる。

- ①道路に捨てられた空き缶やゴミ拾い、地域の清掃活動。学校や神社・お寺の草取り、落ち葉の清掃など。
- ②保育所の子どもと遊ぶ活動。高齢者施設のお年寄りをはげます活動など。
- ③書室の破損した本を修理するなど。

子どもたちが「ボランティア活動として意識しているのは、だいたい①②③のような活動であるが、さらには、自分も食べたり使用することになる家庭や合宿での「米あらい」、「スリッパならべ」や、中には、家の庭の草取りや、部屋の掃除、さらには自分の部屋の掃除・片付けをも「ボランティア活動」と捉えて、作文に書いている子どもも数多く見られる。

「ボランティア活動」の本質は、①自分の意思で行う＜自発性＞と、②自分や身内のためだけにするのではない＜社会性・公益性＞にあるといわれるが、本来、自分の部屋の掃除などは、自分でやって当然なことがらであり、それを「ボランティア活動」と捉えること自体、「ボランティア」への間違った認識を広げていることになる。

「ボランティアパスポート」を活用して、子どもたちを「ボランティア活動」に誘う場合、少なくとも大人の側は、「そもそも『ボランティア』とは何か」ということの本質を把握し、ボランティア活動の中身を明確にしておくことが必要であろう。特に、小学校低学年の場合は、子ども自身の体験と理解がまだ狭いので、慎重を要する。したがって、少なくとも小学校3年生くらいまでの、年少の子どもたちにとっては、むしろ安易に「ボランティア」という言葉を広げないほうが良いのではないと思われる。

### ② 「ボランティア」という言葉の理解をめぐって

子どもにとって「ボランティア活動」が重要である、ということが自明のように語られているけれども、そもそも「ボランティア」という言葉で取り組まれている内容を、「ボランティア」という言葉で表現した方がいいのかどうかを再検討する必要があるのではないかと。



子どもたちが成長・発達していく上での生活・活動の全体を考えた場合、年齢が若い段階から次第に上に行くに従って、その生活・活動の内容は拡大・深化していく。睡眠・食事・排泄などの「基本的生活」活動を身につけることから出発して、「遊び」「学習」「仕事」「表現」活動などその内容が豊かになり、さらに「社会的生活」を営むための資質を身につけて行く。

特に「社会的生活」を営むために必要な資質を考えると、その中に①「話し合う」、②「集い会う」、③「人の役に立つ」活動が含まれる。

「ボランティア」活動という用語で表現してきたことは、じつは人間が「社会的生活」を営むために必要な資質としての③「人の役に立つ」活動のことである。ことさらに「ボランティア」という言葉を使わなくとも、「人の役に立つ活動」に取り組むという姿勢は人間社会で生きていくうえで、常に必要なことであり、不可欠なことである。

「人の役に立つ」ための活動は、本来自らの自発的意思によって行われるものだが、たとえ外から求められた場合でも、つねに①「話し合う」、②「集い会う」という社会的生活を営むために必要な資質とセットで追求されるべき課題であろう。にもかかわらず、「人の役に立つ」側面だけが切り離されて強調されると、＜他人のための活動に参加する＞＜困った人のために奉仕する＞という他律的・慈善的意識に転化する可能性がある。したがって、仲間とともに自治的に「集い」「話し合い」を行いながら、「人の役に立つ」活動に取り組むというトータルな把握が欠かせないものであり、そのプロセスをじっくり保障する視点を見失わないようにすることが重要だと思われる。

「ボランティアパスポート」を使った取り組みを展開する場合も、活動内容についての「話し合い」や、取り組みの後の振り返りに関する「集いあい」活動が行われているのかどうかに注目する必要がある。

## 5. 『ボランティアパスポート』のキッカケ作りとしての役割を問い直す

「ボランティアパスポート」が取り組みのキッカケとなり、最初は先生や親に誘われて取り組みに参加したとしても、また最初は、本来のボランティア活動の内容からは外れた取り組みだったとしても、第1歩を踏み出し、他の人々と体験を共有するプロセスを通じて、次第に「人の役に立つことの気持ちよさ」や「感謝された時の喜び」、さらに「自分から進んで取り組む気持ち」が大切であること」の発見など、さまざまな“気づき”を得ることが重要であろう。

そうしたプロセスにおいて、子どもたちが感じ、つかんだ“気づき”を大切にして、「人の役に立つ」活動へと発展させていくことができるように、丁寧に導いていくことができる大人の姿勢と役割こそが問われているのである。

今後、平成26年度に取り組むべき内容

## Ⅲ. 諸外国における子どもの「ボランティア活動」の捉え方と位置づけについて

## Ⅳ. 子ども期のボランティア活動参加は、「人間力」の育成にどうつながるか